

いしのもり しょうたろう  
**石ノ森 章太郎**

昭和13年～平成10年(1938～1998)  
漫画家 登米市



子供のころから絵が得意で、まんが家として才能を発揮しました。まんがで表現することの可能性を広げ、後のまんが家にも大きな影響をあたえました。「まんがの王様」と呼ばれ、作品数が世界で最も多いまんが家としてギネスに認定されました。

さとう ちゅうりょう  
**佐藤 忠良**

明治45年～平成23年(1912～2011)  
彫刻家 大和町・丸森町



自らを職人と呼んで、彫刻の技をみがきました。人間愛や自然愛にあふれた多くの作品をつくり、全国各地に展示されています。また、絵本「おおきなかぶ」のさし絵をかくなど、子供たちの感性を豊かに育むための美術教育にも力を注ぎました。

かんせい とわざ  
**感性と技をみがいて**

こむろ とおる  
**小室 達**

明治32年～昭和28年(1899～1953)  
彫刻家 柴田町



美術大学の学生のころから才能を発揮し、努力を重ねて、高い評価を受ける彫刻家になりました。仙台城の跡にある伊達政宗の騎馬像(馬に乗った姿を表した像)は、小室達が制作しました。この騎馬像は、現在も宮城県のシンボルの一つとして有名です。

たかはし えいきち  
**高橋 英吉**

明治44年～昭和17年(1911～1942)  
彫刻家 石巻市



彫刻家になるという夢に向かって、子供のころから努力を続けました。ふるさとの海を心から愛し、海をテーマにした自分らしい作品作りに取り組みました。彫刻家としての将来を期待されていましたが、戦争により、31才の若さで亡くなりました。

しろとり せいご  
**白鳥 省吾**

明治23年～昭和48年(1890～1973)  
詩人 栗原市



文芸誌に送った詩が入選したことをきっかけに、詩人の道に進みました。ふるさとの自然や農民の生活などを題材に、日常使う言葉で分かりやすく詩を表現しました。また、多くの学校の校歌の作詞や、アメリカの詩を紹介することでも活躍しました。

さとう ちゅうたろう  
**佐藤 忠太郎**

明治34年～昭和43年(1901～1968)  
民芸研究家 白石市



古くから伝わる「白石紙布」(白石和紙を使った織物)の技法が、明治時代になると受けつがれなくなりました。佐藤忠太郎は、郷土の特産品をなくしてはいけないと考えて研究を重ね、じょうぶで美しい「白石紙布」を復活させました。

みずかみ ふじ  
**水上 不二**

明治37年～昭和40年(1904～1965)  
詩人 気仙沼市



気仙沼市の大島に生まれました。美しい海や山に囲まれて過ごした少年時代にみがかれた感性を生かし、海や子供たちへの愛情あふれる詩を数多く残しました。ふるさとの小・中学校の校歌や児童会の歌なども作詞し、現在も歌いつがれています。

ちば あやの  
**千葉 あやの**

明治22年～昭和55年(1889～1980)  
藍染伝承者 栗原市



日本で最も古い藍染の技法を受けついで者として、人間国宝に指定されました。藍の栽培や自然発酵による染め方は手間がかかり、やめてしまう人がたくさんいましたが、藍染だけは続けるようにという先代の教えを守り、染物を作り続けました。

おの であ ひさゆき  
**小野寺 久幸**

昭和4年～平成23年(1929～2011)  
文化財修理技師 気仙沼市



子供のころから工作が好きだったことから、仏像を修理する仕事につきました。高い技術を身に付け、多くの国宝や文化財の修理を行いました。東大寺の仁王像の修理を見事に成功させたことにより、東大寺から「大仏師」という称号をあたえられました。

でんとう  
**伝統を受けついで**

ごとう どうすい  
**後藤 桃水**

明治13年～昭和35年(1880～1960)  
民謡研究家 東松島市



子供のころは音楽の勉強が苦手でしたが、尺八の音色に心を動かされて、唄の道を志しました。尺八を教えながら、全国にいる唄い手と交流し、全国各地に伝わる唄を「民謡」と名付けました。「民謡」の価値を高めたことから「民謡の父」と呼ばれています。